

ベルギーにおける「生きる力」を育む教育活動の特色について

前ブラッセル日本人学校 教諭

静岡県浜松市立有玉小学校 教諭 結城 知則

キーワード：生きる力，個性重視，地域の教育力

1. はじめに

日常生活の中で、ベルギーやヨーロッパの人たちの「生きる力」に驚かされることが多くある。見ず知らずの人にも普通にあいさつをしたり、自己主張をしっかりとしたり、時には日本人以上の優しさに遭遇したりすることがある。特に、自分の信念を貫く芯の強さは、周りとの迎合しがちな私たち日本人が見習わなければならない点である。その力は何によって培われてきたのかを、ベルギーの教育事情から探ることは、今後の日本の教育の方向や、自分自身の指導方針を改善する上で大いに役立つと考えた。

また、多くの実地調査をすることで、ベルギーの教育事情と日本との違い、ベルギーの教育が作り出す「生きる力」を肌で感じてみたいと考えた。

2. 現地校の学校教育の概要

(1) 小学校

ベルギーでは、6歳になる年の9月に小学校に入学する。初等教育は日本の小学校とほぼ同じだが、学年相応以上に能力のある子どもは飛び級をしたり、反対に、学年修了水準に達していないと判断された子どもは、教師、保護者、アドバイザーの相談のもと、留年したりすることがある。また、ベルギーには学区制はなく、保護者は公立、私立を問わず、学校を自由に選ぶことができる。また、学費は高等学校まで一切国が補助するため、一部の私立学校を除き、無料である。

完全週5日制で、水曜日は午前中授業になり、午後は各区（コミュン）のクラブ活動に参加する子どもが多い。昼食は自由で、帰宅しても給食を食べても弁当でも良いことになっている。

ベルギーでは、教育政策に関する権限が国ではなく、連邦を構成する言語共同体（フランス語共同体・オランダ語共同体・ドイツ語共同体）にあり、小学校からそれぞれの公用語を学ぶことが義務づけられている。

(2) 中学校・高等学校

中学校へは、12歳になる年の9月に入学する。ベルギーでは、中・高6年間が一貫教育になっている。そして、中学3年の時点で将来の進路を決定する。大学を目指す一般コース、美術や音楽などの芸術コース、専門学校を目指す実科コース、就職を希望する職業コースにそれぞれ分かれる。

(3) 大学

大学への進学に選抜試験はない。中学校・高等学校での成績が条件になり、生徒が自由に大学を選択することができる。ベルギーには現在、8つの大学がある。大学では、最初の2年間は教養課程、後の2年間は専門課程となっている。

3. 実地調査1「地域の学校教育事情」

(1) 「スカンジナビアン」スクール

ブリュッセル市近郊にあるスカンジナビアンスクールを訪問し、学校教育について取材をした。その結果、以下のようなカリキュラム等の特色を知ることができた。

- ・学年は1年生から10年生まで、6才から15才までの子どもが通級し、1～3年、4～6年、7～10年生の3つの学部に分かれている。
- ・フランス語と英語の授業は毎日あり、様々な教科でもフランス語や英語を使って授業が行われている。
- ・教科によってクラス人数が違い、特に数学などの場合は、本国語を使い少人数で学習している。
- ・スポーツやカルチャーは放課後のオプションとして別に受講料を払い、現地のコーチが指導する。

(2) 「ラ・サピニエール」スクール

ラ・サピニエールスクールは、ブリュッセル市南部にある、現地の児童生徒の通う学校である。当校で学習発表会を開催するとの知らせを聞き、訪問することにした。

各ブースに分かれ、それぞれが日頃学習してきた成果を保護者の前で発表していた。体育の発表では、フラフープや大玉などの用具を使ったり、マット運動の技を取り入れた演技をしたりしていた。児童それぞれが表現したい運動を、教師と相談して選択している印象を受けた。技の到達度や表現の豊かさは個により差があったが、練習してきたことを一生懸命発揮しようとする児童の姿がよく見られた。



また、校庭では、歌とダンスの発表が行われていた。民族衣装に身を包んだ低学年の児童が、曲に合わせて楽しそうに踊る姿が印象に残った。全員の動きは上手にそろっているわけではないが、一人一人の動きはそれぞれ表現豊かで、また、思い思いの衣装や化粧がその表現をより引き立たせていた。全員で一つのものを作り上げようというよりも、自分らしさを発揮し、自分の役割をしっかりと行うことで全体に貢献しようという発表が多く見られた。

(3) 「ラ・クラリエール」スクール

ラ・クラリエールスクールは、本校から車で10分ほどのところにある、肢体不自由者のための特別支援学校である。当校では、クリスマスのシーズンになると、地域の住民を招待して「クリスマスマーケット」を開催する。児童生徒が作った作品を展示したり、クリスマスマーケットで地域住民と話をしたりするなど、交流の機会として設定されている。訪問した時には、障害を持った児童生徒が伸び伸びと書いた文字や、楽しみながら描いたと思われる数々の図画や工作が並んでいた。また、地域の住民も多くの店舗を出しており、大変賑わいをみせていた。地域の住民も、障害を持つ児童生徒を受け入れ、ともに生きていくことの大切さを理解しているようだった。

(4) 実地調査1の考察

スカンジナビアスクールでは、日本人学校同様に、教科指導に重点を置いていた。しかし、アプローチの仕方に違いがあることが分かった。日本人学校は、教師一人一人が力量を高め、一斉授業の中でいかに個に応じた指導をするかに重点が置かれているが、スカンジナビアスクールでは、教科によって大きくクラス人数や言語を変えるなど、ハード面での配慮に重点が置かれている。また、可能な限り他の教科でも外国語による学習を進めている。児童生徒の外国語に接する機会が増えるだけでなく、外国語で物事を考える力を養う積極的な外国語教育だと言える。

ラ・サピニエールスクールでは、一人一人の思いや願いを尊重している印象を強く受けた。日本の学校ならば、全体が同じ動きをすることで表現の美しさを求めることが多いが、ベルギーの学校では、一人一人の動きに違いがあっても、それぞれが一生懸命表現することで、一人も全体も輝いて見えた。

ラ・クラリエールスクールでは、地域住民の障害者へのサポート意識の高さが伺えた。ラ・クラリエールスクールが、地域住民にとって一つのコミュニティとして存在していた。また、クリスマスマーケットが地域の大切なイベントとして根付いていた。これは、学校側の継続的な努力もさることながら、やはり地域の人々の心の中に「共生」という意識が育つよう、ベルギーの教育が作り上げてきたものだろう。

4. 実地調査2「地域の見学施設」

(1) 収容所見学

ベルギーには、第2次世界大戦の時に用いられた収容所が現在でも残され、平和教育のために施設見学ができるようになっている。そこで、アントワープ近郊にある「ブレンドンク強制収容所」を訪問した。説明スタッフが大変多く、多くの団体に対応できる体制が整っていることが伺えた。

施設内に入ると、収容所の手前にミーティングルームのある建物があった。ここでは、事前のオリエンテーリングや食事ができるようになっていた。収容所内は、決められた見学コースがあり、独房や拷問部屋では、スタッフが当時の様子を具体的に説明された。施設は、当時の様子が実感できるように、当時の道具と同じものが展示されていたり、写真や説明文が至るところに掲示されていたりした。スタッフは経験を積んでいる様子で、大きな話し声の見学者に対して厳しく注意する姿が強く印象に残った。



(2) 浄水場見学

ブリュッセル市近郊のナミュールにある「VEDRIN浄水場」では、水の消毒の様子を見学できるようになっている。そこで、施設見学を行った。浄水場内では見学コースが用意され、スタッフが機械や貯水槽など、大切な場所では時折立ち止まりながら、水をくみ上げる様子や消毒の様子を詳しく説明していた。一通り施設見学を済ませると、ビデオルームに案内され、浄水場の開発当時の様子や、施設の仕組みを映像で詳しく説明してくれた。

(3) スーパーマーケット見学

ブリュッセル市内に多くの店舗を持つスーパーマーケットのチェーン店「カルフル」では、店内の様子はもちろん、パン製造所や精肉所等の見学もすることができた。特に、パン製造所では、小麦粉にイースト菌を入れてこねる様子を実演したり、様々な機械の使い方を説明したりするなど、丁寧に仕組みを教えてくれた。最後に、児童一人一人にジュースやパンのお土産まで用意されていた。スーパーマーケット見学が、地域を知る学習として地元の学校にも深く根付いていることを感じた。

(4) 消防署見学

ブリュッセルには、中央消防署をはじめとして、市内に9つの消防署がある。中でもデルタ消防署は、本校から徒歩で10分程のところにあるため、小学3年生の社会科見学として、毎年訪れている消防署である。

まずはじめに、消防の仕事を知るためにビデオを視聴した。消防には、火を消す以外にも様々な仕事があることや、訓練や点検が大切なこと、勤務の様子などを、映像で分かりやすく説明していた。

その後、消防服や消防車の見学をした。最後には、はしご車に乗る体験と放水体験をした。消防の仕事は非常に過酷だが、子どもたちに楽しく学んでもらいたいという消防署側の意図を感じた。

(5) チョコレート工場見学

ベルギーのチョコレートは世界的に有名で、やはり工場見学も充実している。しかも、大変人気があるため、常に1年先まで見学予約が埋まっている。今回は、小学3年生の社会科見学として訪問した。

まず、オフィスに通されると、見学者は全員、作業衣と頭にかぶるネットを渡され、身に付ける。次に、見学コースに沿っての見学が始まる。辺りにチョコレートの甘い香りが立ちこめる。カカオ豆をつぶす様子や液状になったチョコレートの様子、型に入れる機械の様子を見学する。スタッフが必要に応じて解説をするので、作り方や作る上での工夫がよく分かった。

次に、チョコレート作り体験をした。液状のチョコレートを型に流す工程を体験する。包装紙に自由に絵を描き、

それを自分のチョコレートに包装することで、オリジナルのチョコレートが出来上がる。

最後に、博物館を見学し、チョコレートの歴史や工場の歴史、工夫などについて、実物や映像で学ぶことができた。

(6) 実地調査2の考察

見学のできる施設が日本と同様、あるいはそれ以上に充実している印象を強く持った。それは、次のような理由からである。

- ・見学の内容が充実していること（コース設定、スタッフの配置、パンフレット、ビデオ等）
- ・ミーティングルーム等、団体のための施設も整っていること
- ・学校等の団体には安い料金設定であること
- ・施設見学を行う学校が多いこと
- ・お土産や体験コーナーの充実など、保護者や地域へのPR体制が整っていること

今回の調査で、ベルギーでは見学施設が充実していて、実際に多くの学校で施設見学を実施していることが分かった。地域の教育力が子どもたちの「生きる力」の伸長に大きな影響を与える。その意味では、ベルギーの教育体制は優れているといえるだろう。

5. おわりに

ベルギーの教育事情を調査して、「生きる力」とは、目標をもち、自分の将来像を創造することだと感じた。そのために、学校教育では、学習場面、生活場面において、一人一人の思いや願いを認め、それらが達成できるような指導体制を作り上げていた。また、表現や体験活動が充実するよう、行事計画や学習指導を工夫している様子も見られた。さらに、見学施設の充実など、学校教育を支える地域の強力なバックアップ体制も欠かすことができないものであった。

ベルギーやヨーロッパの人々を見ていると、自分の生き方に自信をもち、堂々と人生を生活しているように感じられる。今回の調査で学んだことを、日本の学校での指導に生かし、夢や志をもった児童生徒の育成のために全力を注ぎたいと考えている。